

2012年
5月31日
木曜日

平山健二郎 教授（金融論）

経済小説のすすめ

二〇〇七年二月から三月にかけてNHK土曜ドラマで「ハゲタカ」が放送されました。普段はドラマなどあまり見ないのですが、たまたま見たこのドラマはいわゆる外資系ハゲタカファンドをめぐるエピソードを生き活きと描いており、引き込まれました。そしてドラマの原作と言われる真山仁『ハゲタカ』を読んで、経済小説の魅力にはまってしまったのでした。私は企業に勤めた経験がないので、企業内でのような会話が交わされ、どのような駆け引きが行われているか、よく知りません。

経済小説はそういう知らない企業社会の内幕を教えてください。この『ハゲタカ』では一九九〇年代以降の日本経済の軌跡に合わせて、不良債権と化した銀行の貸出債権を安く買いたたくハゲタカファンドや、放漫経営の同族企業をめぐる再生劇が銀行

の内紛とともに生々しく描かれています。しかし単にビジネスの描写にとどまらず、主人公の一人が元ジャズピアニストだったためビル・エバンスのジャズ音楽が登場したり、老舗ホテルの経営をついだ若き女性のフライフィッシングの場面があったりと、ストーリー展開に幅があり、広く楽しませてくれる上質のエンタテインメントとなっています。

その後、私のゼミに年間百冊は本を読むという優秀なN君が入ってきました。彼が「先生が金融の専門家なら、これは面白いですよ」と薦めてくれたのが黒木亮『トップレフト』と『巨大投資銀行』です。前者は日本の銀行とアメリカの投資銀行とが国際的なシンジケートローンをめぐって丁々発止のせめぎあいを描いた作品です。後者も国際的な投資銀行の各国での案件をめぐる活躍な

どが活写されています。著者の黒木亮氏は海外での経験も豊かです。で、ニューヨーク、イスタンブール、ローマ、モスクワ、カイロなど世界各地の歴史・文化・食事などの話も交えながら、多くの主人公の生き様も含めて、奥行き深く企業・人間を描いています。（彼のエッセー集『リスクは金なり』もイチオシです。）

最近読んだ作品としては山崎豊子『不毛地帯』があります。これは陸軍参謀だった瀬島龍三氏がモデルと言われており、彼の十一年に及ぶシベリア抑留の筆舌に尽くしがたい難辛苦と、日本への帰還後に採用された伊藤忠商事での大活躍を描いています。以前から瀬島氏の名前だけは知っていました。昨年（二〇一一年）九月の日経新聞「私の履歴書」欄を元伊藤忠商事会長の室伏稔氏が執筆しており、その中で室伏氏が上

司だった瀬島氏を絶賛していたので、色々と調べたところ、この『不毛地帯』のモデルが瀬島氏と知り、読んでみたのです。これは五巻に及ぶ長編ですが、原作が週刊誌に掲載されていたためか、次から次へと息を飲むようなドラマが展開し、全く長いと感じさせない作品でした。航空自衛隊のジェット戦闘機選定をめぐるきな臭い政治劇や、商社内での抗争など、戦後日本の闇と光が活き活きと描かれています。

経済小説を読むことで、現実や過去の経済・ビジネスの実態を知ることが出来るし、大人の会話を耳を傾け、上司への口の利き方、宴会での作法等々、大変勉強になります。若い諸君にも是非、経済小説をお薦めする次第です。